

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：84402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21601019

研究課題名（和文） 哺乳類等骨格標本作成サークルのネットワーク化と普及教育事業への展開方法の共有化

研究課題名（英文） Network building of groups making bone specimens, and study of how to use the specimens in common

研究代表者

和田 岳（WADA TAKESHI）

大阪市立自然史博物館・学芸課・学芸員

研究者番号：60270724

研究成果の概要（和文）：2度のホネホネサミットを開催し、日本各地の博物館等で骨格標本などを作製しているグループ・個人が集結する機会を持った。その機会にホネの全国ネットワーク「ホネット」を立ち上げ、メーリングリスト・研修の機会を通じて交流した。また、博物館や学校教育などの場で使えるホネの普及教育活動展開用キットを作成し、その活用について「ホネット」の場で意見交換を行った。

研究成果の概要（英文）：“Hone-hone Summit” (a meeting of groups and individuals concerning bone specimens) was held, and “Ho-net” (the network of groups and individuals concerning bone specimens) was built. Members of “Ho-net” communicated in a mailing-list and meetings. Portable bone sets were made for museum and school education, through discussion in “Ho-net”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,300,000	390,000	1,690,000
22年度	500,000	150,000	650,000
23年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：生態学

科研費の分科・細目：博物館学

キーワード：骨格標本・標本作成サークル・ネットワーク・普及教育

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 大阪市立自然史博物館では、2003年より「なにわホネホネ団」というサークルが活動している。このサークルは、哺乳類や鳥類などの死体から、骨格標本やなめし皮・仮剥製を作成することを主な活動内容としている。完成した標本は原則として大阪市立自然史博物館に収めて、広く調査研究

や普及教育活動に役立てている。この活動が、マスコミで取り上げられ、また人づてにも伝わって、次々と新たなメンバーが加わった。設立当初は研究代表者を含む3名で始まった活動が、5年後の2008年には、115名にも増えている。哺乳類の死体の皮を剥き、骨格標本を作るという作業は、一

般的には眉をひそめられそうな活動なのだが、予想外に多くの人に興味を持っていることがわかる。

メンバーが増えるにしたがって、「なにわホネホネ団」の活動は、博物館の資料収集保管事業に貢献するのみならず、普及教育事業の側面からも重要なツールとなりうる事が明らかとなってきた。間近に本物の哺乳類や鳥類に接する機会は、本やインターネットでは決して得られることのない本物の動物の体についての知識を得る機会も提供している。さらに「なにわホネホネ団」は、さまざまなイベントに出掛けて、哺乳類の骨格標本やなめし皮作りのみならず、生き物の記録を標本として残す事の重要性についての普及活動を展開している。その結果、多くの新たなメンバーを獲得すると共に、博物館に多くの哺乳類の死体が集まるようになってきている。これは地域の動物相を記録する上で、貴重な情報の蓄積という役割も果たしている。

また「なにわホネホネ団」の活動が頻繁にマスコミに取り上げられる事によって、大阪市立自然史博物館の名前が全国で浸透してきており、広報面での効果も大きい。以上から、ユニークな活動を展開するサークルの育成は、博物館運営の多様な側面でプラスに働くことがわかる。

(2) こうした「なにわホネホネ団」の活動の中で、日本各地に同様の活動をしているサークル・個人がいることが明らかになってきた。その多くは、各地の博物館で細々と活動しており、「なにわホネホネ団」との大きな違いは、興味を持った人に活動の門戸を広げておらず、興味を持った内輪の少人数に活動を制限している点にある。哺乳類の皮を剥くといった活動の性格上、少しやり方を間違えると、市民から避難の声

があがる恐れがあり、それが門戸を広げることをためらわせていると考えられる。しかし、博物館の資料収集活動・普及教育活動と絡めることで、門戸を広げても問題があるどころか、むしろメリットが大きいことは、「なにわホネホネ団」の活動が示している。

(3) 以上から、「なにわホネホネ団」の活動を、哺乳類等標本作成を通じた普及活動展開の一つのモデルとして広めることで、国内の博物館活動を活性化させる可能性が考えられる。それには、日本各地で同様の活動をしているサークルや個人が集まる機会を持ち、ネットワーク化し、その後もネットワークを維持し、互いに情報や活動のノウハウを交換することが重要であると考えられる。またこうした活動を通じた普及教育活動のあり方についての研究も必要だろう。

## 2. 研究の目的

日本各地の哺乳類・鳥類の標本作成サークルや個人が一堂に集まる機会を作り、ネットワークを構築する。同時に、哺乳類・鳥類の標本作成という活動を通じた普及教育のあり方を検討し、共有化を試みる。

本研究は、博物館の場における実践的研究であり、今後のさらなる研究対象となりうる事例を提供するのが、大きな目的となる。

## 3. 研究の方法

初年度に、日本各地の日本各地の哺乳類・鳥類の標本作成サークルや個人が一堂に集まる機会「ホネホネサミット」を開催する。その場で、メーリングリスト・ホームページ・研修の機会を通じて交流する場「ホネネット」を結成する。

次年度以降は、「ホネネット」を通じた情報交換・意見交換を通じた展開を図る。また、その場での議論を通じて、博物館の普及事業や学校教育の場で活用できる普及教育展開用ホネキット「ホネホネ出前セット」を作成する。

最終年度にも再び「ホネホネサミット」を開催し、今後の展開について検討する。同時に「ホネホネ出前セット」の改良と共有化を図る。

## 4. 研究成果

2回のホネホネサミットを開催し、ホネの全国ネットワーク「ホネネット」が立ち上がった。「ホネネット」を通じた各地のホネ関係者の交流が進み、今後はさらに各地でホネホネサミットの開催が検討されている。

また、ホネホネサミットの場で刺激を受けて、活動を活発化させた博物館関連サークルも多い。

「ホネホネ出前セット」も完成し、さまざまな意見の中で改良が行われた。

博物館学的な実践としては、十分な成果を上げ、博物館周辺コミュニティの活性化につながったものと考えられる。なにより博物館周辺で活動するサークルのネットワークという極めて珍しいつながりを作り上げることが出来た。しかし、博物館学研究としては、実践ばかりが先行し、強力な事例を提供したものの、その研究あるいは評価は十分にできてはいないのが課題である。今後のネットワークの展開と、その客観的評価が行われることが望ましい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

和田岳、高陵社書店、2009年、「博物館とサークル 博物館コミュニティの幅を広げる」(n「自然市博物館」を変えて行く)、84-94

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ

<http://www.omnh.net/ho-net/>

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

和田 岳 (WADA TAKESHI)

大阪市立自然史博物館・学芸課・学芸員

研究者番号：60270724

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし